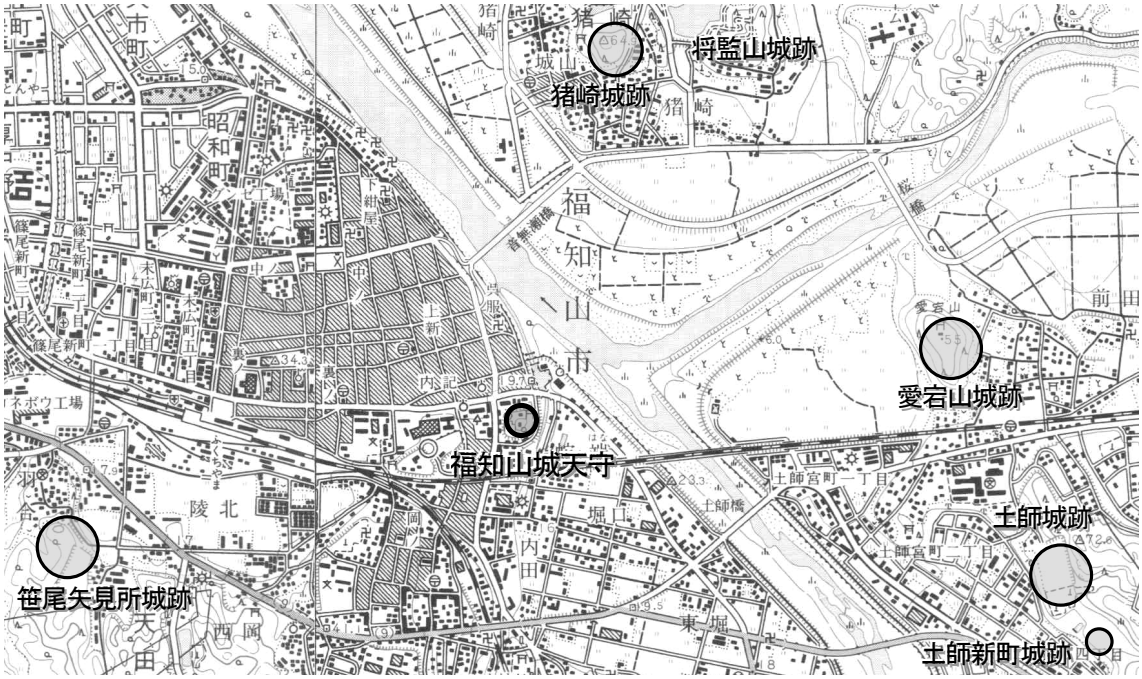
現地説明会資料
平成15年1月25日
福知山市教育委員会生涯学習課

福知山城石垣発掘調査

事 業 名　　福知山城本丸石垣(天守丸)発掘調査
調 査 地　　福知山市字内記地内
調査原因　　福知山城公園整備に伴う石垣補強事業
調査期間　　平成12年12月 ～ 平成15年 1月
調査主体　　福知山市教育委員会
調査担当　　福知山市教育委員会 生涯学習課 八瀬正雄、永谷隆夫

はじめに

福知山城は、明治の廃城により本丸・二の丸の建物はことごとく取り壊され、丘は崩され堀も埋められました。昭和61年には市民の浄財で天守閣が再建されましたが、往時を偲ぶものは石垣のみです。今、城跡は福知山城公園として市民憩いの場となっています。しかしながら石垣は400年の歳月をへて老朽化が激しく、亀裂・剥落、膨らみが目立ち、また公園整備の一環として石垣上に塀・櫓など建設する計画があり、今後石垣に過大な荷重をかける恐れがありました。このため、福知山市では来園者の安全と、建物を建築する際の基礎力を確保するため、石垣の改修(平成の石垣大改修)を計画しました。同石垣が福知山市史跡に指定されていることから、文化財的価値が損なわれることがないよう配慮し、改修工事は石垣石材の全てに番号を打って取りはずし、地盤を安定させる補強工事を行った後、再び同じ場所に積み上げ、石はできる限り当初のものを使用し、破損石材のみ取り替える工法です。今回の発掘調査は石垣の構築状況とその時代を検証するため実施したものです。



福知山城と周辺の中世山城

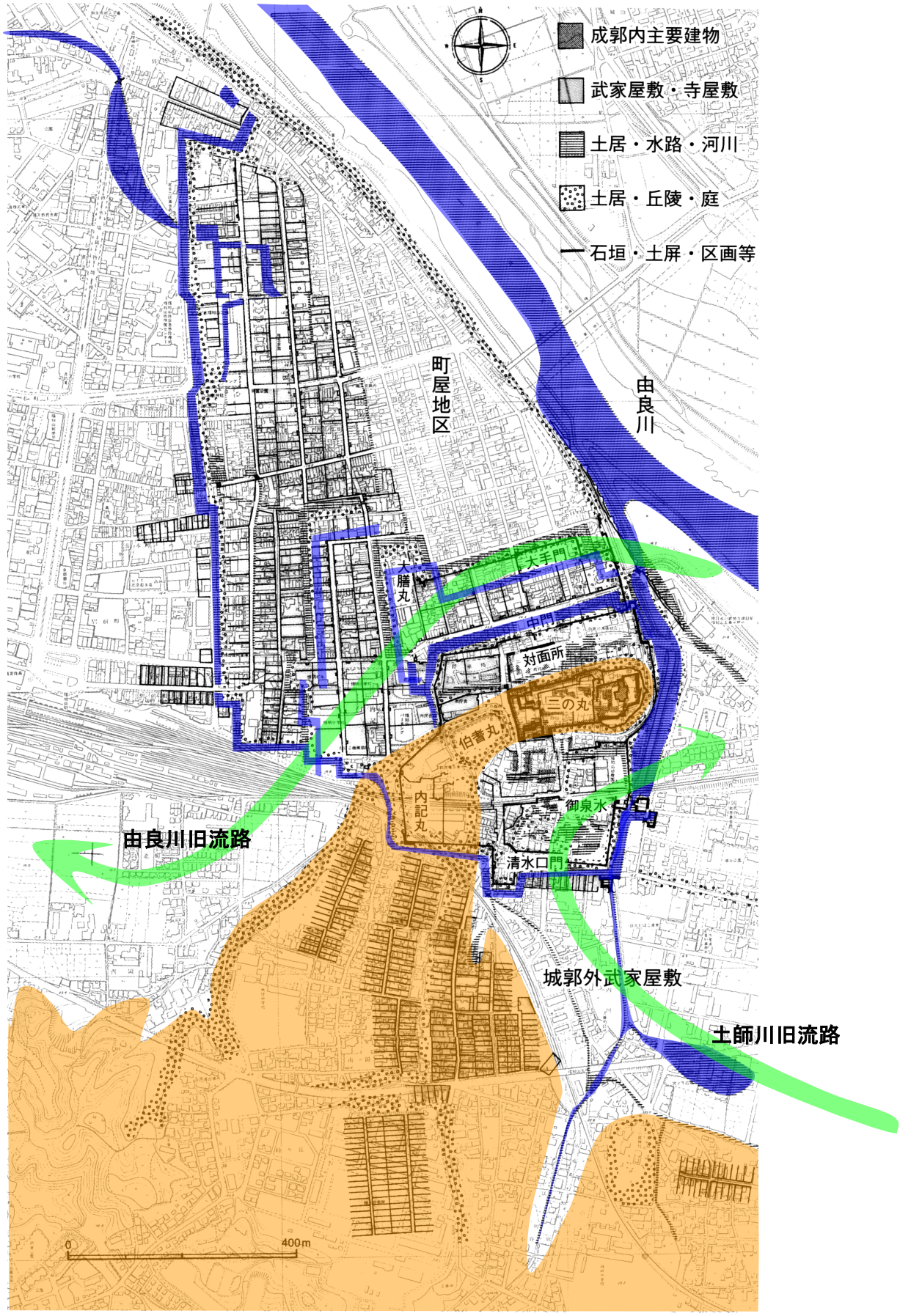
福知山城について

〈地理〉 福知山市街地の南方、今は国道９号線、JR山陰線・福知山線などで分断され、面影は薄れましたが、かつては南方の山地からひとつづきで蛇のように突き出す丘がありました。地形図をよく見ると土師川・由良川の流れによって削りとられた基部で幅約800m・先端部で幅約100m、平野からの高さ約20mの平坦な丘の姿が浮かびあがります。中世には天田郡の豪族塩見一族がこの地に横山城と称する城館を築いたといわれ、丘陵を区画した曲輪群を築いた山城の存在が考えられます。丘の先端から四方を眺めてみれば、福知山盆地全体を望むことができ、この地が土師川・由良川を自然の堀とする天然の要害地にあり、但馬・丹後あるいは山城への交通の分岐点に位置し、軍事・戦略上最も要衝の地にあることがわかります。

〈歴史〉この地に近世的な城郭と城下町を創り、今の福知山の基礎を築いたのが天正七年(1579)丹波を平定した明智光秀と伝えられます。伝聞や資料によれば、光秀は福知山城の縄張りを行い、城下町を造るために堤防を築いて由良川の流れを変え、町に地子銭免除の特権を与えて商家を育てる一方、治政に反抗的な近隣社寺を打ち壊し墓石を天守台の石垣に利用したといわれています。その功罪は光秀を祭祀した御霊神社や「福知山音頭」の伝承とともに天守台石垣に残る多数の墓石群からうかがわれます。

天正十年(1582)、主君織田信長を本能寺に討った光秀は、数日後には秀吉に破れ、ここに丹波領主光秀の時代はわずか三年足らずで終わりを告げます。今に伝わる城下町と壮大な城郭は光秀滅亡後、杉原家次、小野木重勝によって逐次増改築が行われ、特に関ケ原の合戦後に入部した有馬豊氏の頃完成したと考えられます。以後城主が転々と替わるなか、明治維新に至るまでの270年間、最高十二万石の福知山藩主の居城として藩政が執り行われました。

松平時代絵図（城郭部）

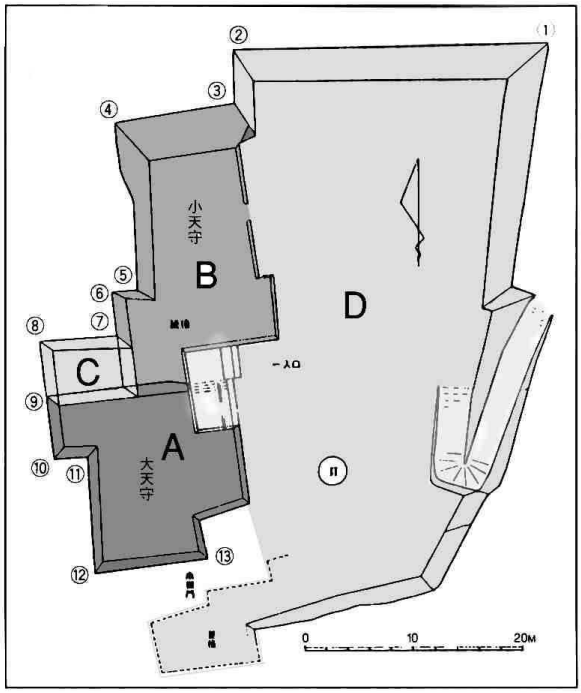

成郭内主要建物
武家屋敷・寺屋敷
土居・水路・河川
土居・丘陵・庭
石垣・土屏・区画等
町屋地区
由良川
大手門
大膳丸
中門
対面所
三の丸
伯耆丸
内記丸
御泉水
清水口門
由良川旧流路
城郭外武家屋敷
土師川旧流路
0
400m

〈縄張〉 福知山城の縄張りを知るのに最適なのは、各城主の残した城下絵図です。残念ながら光秀期まで遡る絵図は伝えられていないため、当初の様子を知ることはできませんが、最も完成された松平時代の絵図を見れば、その姿がわかります。城郭部は丘先端の最高地に天守台と本丸を置き、二の丸・伯耆丸(三の丸)が西へと続きます。南側には御泉水とよばれる庭園と蔵・馬屋敷を置き、その西側には内記丸(西の丸)を配置します。このうち石垣を持つのは丘陵上の主要城郭部のみであって、福知山城は山城的な石垣地区と平城的な水掘地区の両方をそなえたお城と見ることができます。城の範囲は東側に法川を利用した大堀を、西側には堀と土居を、南には堀切を、そして北東側は由良川を堀と見立てた城下四方を防御する「総郭型」あるいは「総構え」の構造となっています。

〈石垣〉 今残っている石垣は天守台・本丸にあり、すべて大小の自然石を用いた穴太技法によって積まれています。この石垣を実見された北垣聡一郎氏は、B部④の「出隅」は未発達の算木積みで発生期のソリを持つことから天正期(1573～1592)の特徴を備えている。D部①②③は、④にみられたソリは存在しないが技術的な差異は認められずほぼ相前後した頃に築造された可能性が高い。ただ、石垣構築順序を考えた場合B→Dとなる。B部⑥は天正年間の旧遺構の上に慶長期に積み直し行なわれたものでソリを持っている。C部⑧は「出隅」が算木積として完成されているため慶長年間(1596～1615)の技術と考えられるA部⑨～⑬は転用石が多く含まれているが④の隅角部とあまりにも異なり⑧に類似する技術も認められることから「天正期の遺法を忠実に模した慶長期ごろの遺構」とされています。

以上、技術的な面からはB→D→A－Cという年代観を与えられています。

一方、昭和59年天守閣再建工事に伴った発掘調査では天守台内部より石垣が現れ**A→B→C－D(C－Dの前後関係は不明)の順に何度か拡張・改修されたことが明らか**となりました。このように石垣の様式は実際と矛盾する結果となり、福知山城石垣が新旧の様式が混在した中、築かれたことを物語っています。ただこの時代を考えれば、関ケ原合戦前後の全国的な築造ラッシュ時において、このお城の築造に携わった石積み集団の技術的格差が表れたものと推定できないでしょうか。



天守部分現存石垣

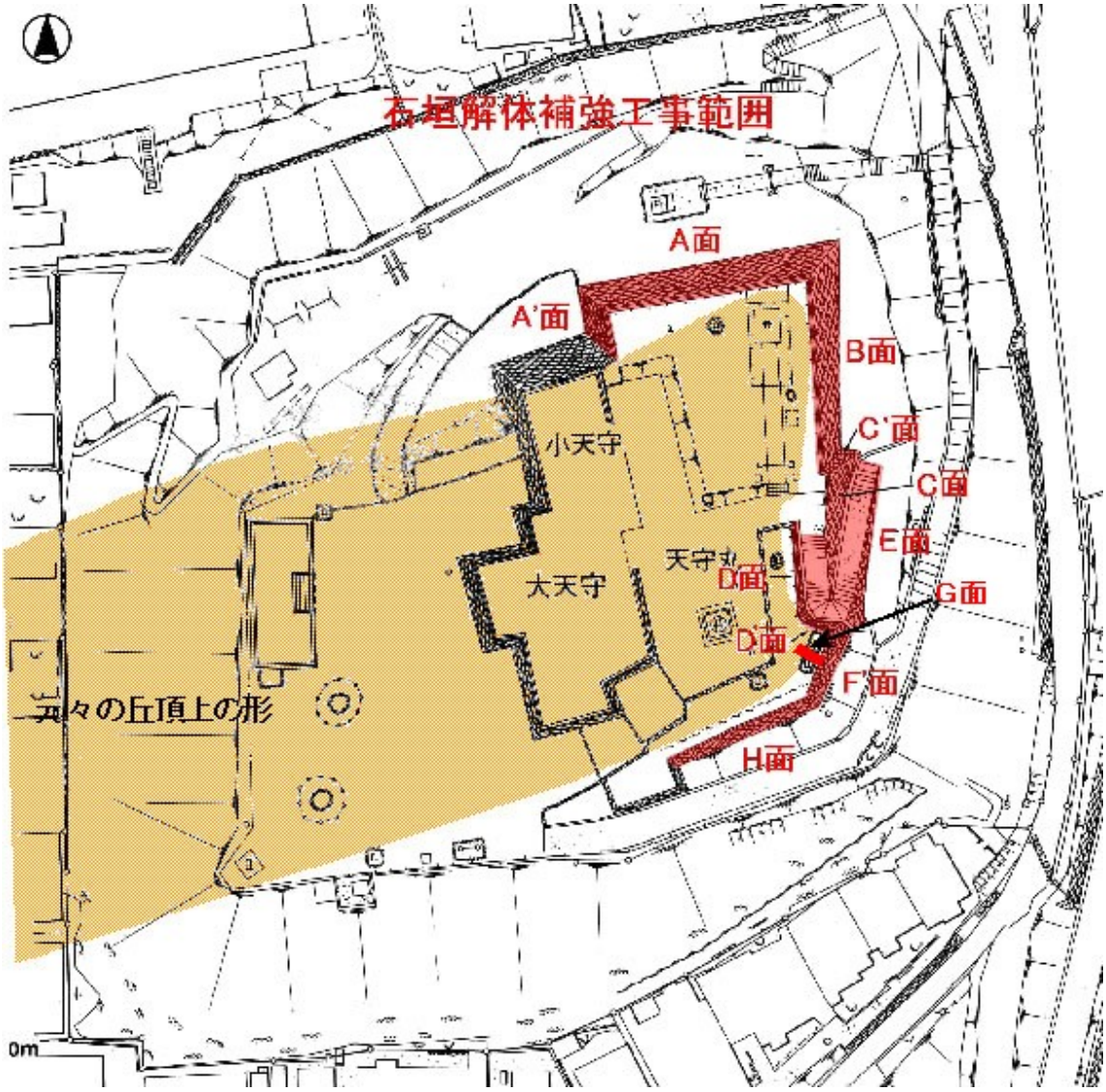
西　暦	元　号	城 主 に 係 わ る 主 な 出 来 事
１３９２	明徳３	管領**細川頼元**丹波国の守護となる。
１４３１	永享３	**内藤備前入道**、丹波国の守護代に任命される。
１５０８	永正５	この頃より多紀郡の**波多野**氏、氷上郡の**赤井**(荻野)氏、丹波国内で勢力を拡大する。
１５０１ ～ １５２１	文亀～ 永正年 間	**塩見**(横山)氏天田郡に移住し勢力を拡大、大膳太夫頼勝の長子＝頼氏が曽我井の地に**横山城**(現福知山城)を築造。
１５６５	永禄８	丹波黒井城主**赤井**(荻野)直正、内藤氏、塩見(横山)氏を滅ぼす。
１５７５	天正３	**織田信長**、明智光秀に丹波・丹後の平定を命ずる。
１５７９	天正７	**明智光秀**、波多野氏・赤井(荻野)氏等を討ち滅ぼし、丹波の平定を復命する。
１５８０	天正８	明智光秀、織田信長より丹波を所領として与えられる。 この頃、横山の地に城館をたて福知山と命名、明智秀満を城代に任命する。
１５８２	天正10	明智光秀、京都**本能寺**に織田信長を討つ、まもなく山崎の合戦で羽柴秀吉に敗れ自害する。
１５８４	天正12	羽柴秀吉の命により、伯父**杉原家次**が近江坂本城より福知山城に入部。代官として福知山を支配。しかし、同年家次は死去。
１５８７	天正15	秀吉の重臣**小野木重勝**、福知山城主となる。
１６００	慶長５	関ケ原の合戦で西軍に属した小野木は、東軍の細川氏を田辺城に攻めたが敗れ自害する。同年１２月、**有馬豊氏**が遠州横須賀城より６万石(以後８万石)をもって福知山に転封。城内・城下を整備・拡充すると共に有馬検地を実施し１２万石を計上。
１６２０	元和６	有馬豊氏、久留米へ移封。
１６２０	元和７	丹渡亀山城より**岡部長盛**が５万石で転封され福知山城主となる。
１６２４	寛永元	岡部氏美濃国大垣へ移封。摂津国中島城より**稲葉紀道**が４万５千７百石で入部。
１６４８	慶安元	稲葉紀道、宮津藩**京極**氏と敵対したため幕府福知山城を包囲、紀道城内で自害する。
１６４９	慶安２	幕命により**松平忠房**が４万５千９百石で福知山城主に任命される。
１６６９	寛文９	松平忠房、肥前島原へ移る。替わって常陸国土浦城より**朽木稙昌**が３万２千石で入部。以後、明治の廃藩置県に至るまでの約二百年間、朽木氏が**福知山藩**の当主を勤める。

中世末から近世初頭の福知山城主関連略年表

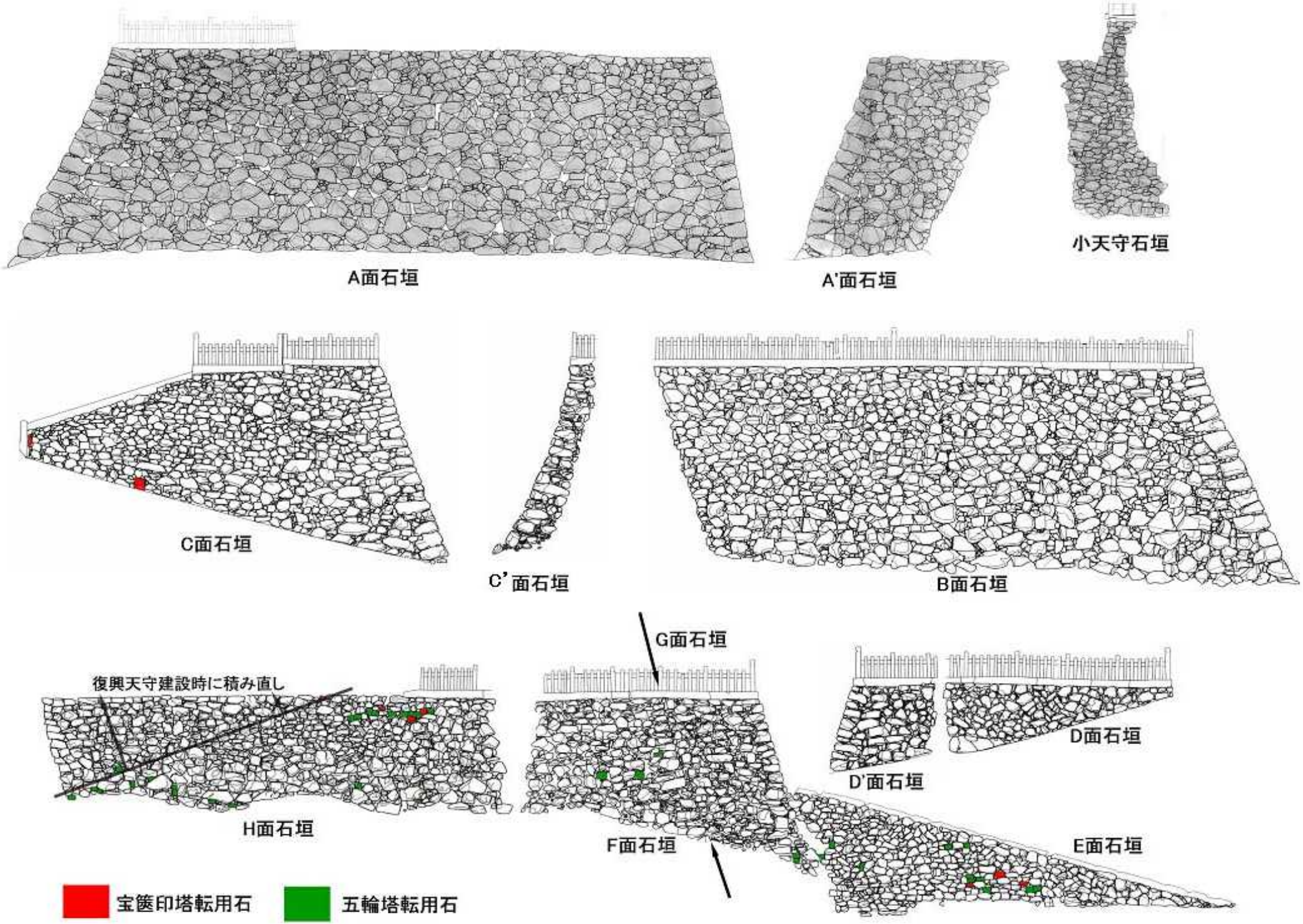
発掘調査

〈調査方法〉 現存する福知山城石垣は、本丸東半域にあり、大・小天守台石垣とこれに連なる本丸(天守丸)石垣があります。具体的には北面(A’・A)、東面(B・C’・C・D・D’・E、F)、南面(H)石垣が残っています。石垣解体は平成 12 年度に A・A’面、13 年度に B～E 面、平成 14 年度に F・H 面を行いました。

発掘調査は、石垣の構築方法を解明すること第一の目的としました。具体的には石垣背後や根石部分の検証であり、旧地形の確認・裏込め状況・石材の積み上げ方法などを確認しました。このため石垣解体前に天場部分、解体後に根石部分の調査行いました。



北面石垣

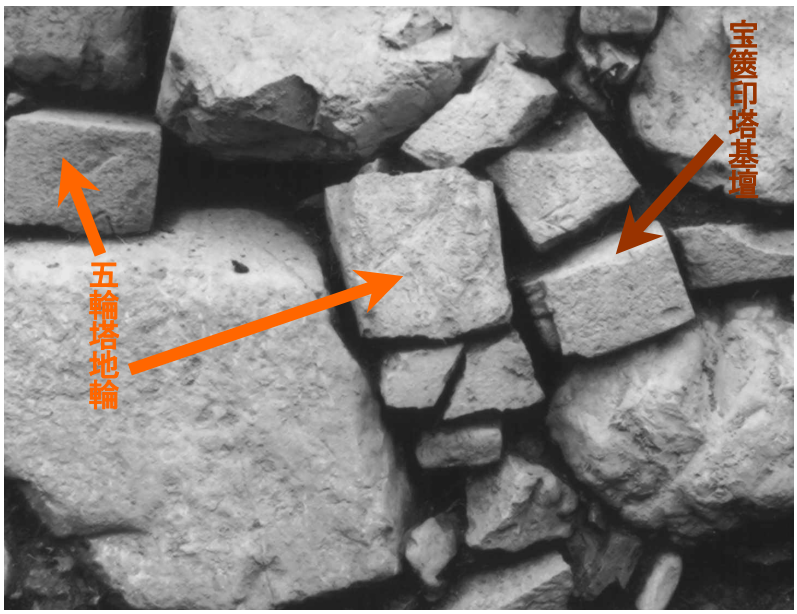

A面石垣
A'面石垣
小天守石垣
C面石垣
C'面石垣
B面石垣
G面石垣
復興天守建設時に積み直し
D面石垣
D'面石垣
H面石垣
F面石垣
E面石垣
宝篋印塔転用石
五輪塔転用石

A面石垣根石

A面石垣根石

H面石垣根石

G面石垣



H面石垣転用石

調査の成果

1　本丸は横山丘陵先端の**地形を最大限利用して造られ**ています。丘の斜面中ほどを削って帯曲輪を造り、そこから石垣を積み上げます。石垣背後は大量の栗石群で覆われています。これは拳大の河原石を用いたもので、石材背面から丘の地盤まで幅広いところで1.5mほどを隙間なく埋め尽くしていました。ただ、下段に行くほどは岩盤との距離は短くなり裏込めも少なくなります。石垣背後の岩盤は、いわゆる「みそ岩」と呼ばれるもので、ブロック状に剥離する風化岩盤です。加工はしやすいのですが軟弱で不安定な地盤です。

2　根石は地表下0.6～1.5mにあり、石材を据えるための溝を掘って現地表に近い高さまで埋め戻すことによって石材が安定するよう工夫がされています。

3　これまで石垣内部に埋もれていた新たな石垣列を2箇所発見することができました。一つはC’面から石垣内部に続く列と、二つ目はF面の途中で90°西に屈曲するG面です。これにより**本丸東面石垣がH･G → F(D) → E → C･C’ → B･Aの順で築造**されていることが分かりました。特にH面は以前より転用石(墓石など)が存在することが知られ、最も古い天守石垣に近接しています。このことから天守**石垣と同じかこれに続く築造の可能性**も考えられます。

4　本年度の調査でF面根石部を調査し、G面から続く石垣列を発見しました。絵図などの比較から**明治時代に破却され埋没した本丸登城門の一つ、加用門**(松平時代絵図での名称)**石垣に相当する**と考えられます。

福知山城は、他の近世城郭同様早くから破却が行われ不明な部分の多いお城です。本丸石垣の築造時期はいつ頃なのでしょうか。現存絵図中で最も古い有馬時代(慶長5～元和6年)には、今見る姿が既に描かれていることから、それ以前が問題です。既に完全に消滅した二ノ丸部分は別として、現存する石垣には光秀の築造伝説を伝えるものもあり、今回H面でも新たに大量の転用石が発見され、あるいは光秀期の石垣とも考えられるかもしれません。**これまで考えられていた以上に早い時期に城郭中心部は整備されていた可能性**が考えられます。